

【口頭発表】

古代日本語の動詞語幹交替より垣間見ゆる、
九州方言が「上一段動詞」を r 語幹動詞たらしむる動機

本発表では、古代日本語の動詞語幹交替という形態現象を確認し、九州方言が「上一段動詞」を r 語幹動詞に移行させる動機をその現象に求める。

次のとおり、古代日本語における「一・二段動詞」および「カ・サ・ナ変動詞」の語幹は、-∅‘終止’や -u‘連体’(上付き 1/4 の音素は清瀬 1971 に言う連結子音・母音)を取る時に交替する(包括性と体系性を優先し、再構形式も実例を欠く形式も挙げる)。

取る	見る	蹴る	去ぬ	上げる	来る	する
使役: tor-ase-	mi-s-ase-	ke-s-ase-	in-ase-	agë-s-ase-	kö-s-ase-	se-s-ase-
否定: tor-a-zu-	mi-zu-	ke-zu-	in-a-zu-	agë-zu-	kö-zu-	se-zu-
回想: tor-i-ker-	mi-ker-	ke-ker-	in-i-ker-	agë-ker-	ki-ker-	si-ker-
<hr/>						
終止: tor-u-∅	mir-u-∅	ku-∅	inu-∅	agu-∅	ku-∅	su-∅
連体: tor-u	mir-u	ku-r-u	inu-r-u	agu-r-u	ku-r-u	su-r-u

「二段動詞」「カ変動詞」「サ変動詞」は語幹末母音を替えるだけであるが、「ナ変動詞」は n 語幹 (= 子音語幹) を u 語幹 (= 母音語幹) に、「一段動詞」は i 語幹 (= 母音語幹) を r 語幹 (= 子音語幹) に交替させるのである。

九州方言で起きた「上一段動詞の五段動詞化」は、形態音韻の面で学校文法に優る Bloch (1946a-b) や清瀬 (1971) に拠って「i 語幹動詞の r 語幹動詞化」と見ても、その動機は「少数派が多数派に併合された」という、数の論理を超えない (cf. 黒木 2012)。しかし、先に挙げた古代日本語の動詞語幹交替を踏まえると、「上一段動詞」とその変遷は次のように考えられる。

「上一段動詞」は i 語幹と r 語幹から成る混交語幹動詞である。この種の動詞は、現代日本語方言の大多数では i 語幹動詞に変わっているが、九州方言では r 語幹動詞としての色を強めている。

参考文献

- 清瀬 義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論——」, 『国語学』 86, pp. 42-56, 国語学会
- 黒木邦彦 (2012) 「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」, 丹羽一彌 (編) 『日本語はどのような膠着語か——用言複合体の研究——』, pp. 104-21, 笠間書院
- Bloch, Bernald. (1946a). *Studies in Colloquial Japanese: I. Inflection. Journal of the American Oriental Society*. Vol. 66. pp. 97-109.
- Bloch, Bernald. (1946b). *Studies in Colloquial Japanese: III. Derivation of inflected words. Journal of the American Oriental Society*. Vol. 66. pp. 304-15.